

日歴協ウェブ・アンケートの結果より（女性研究者）

20201205 野口華世

「生きづらさ」に関する話題提供

1 回答者のプロフィール

- ・有効回答者のうち、女性は138名で、全体の三割弱。
- ・女性回答者の年齢分布は、30代～40代で大きい。30～34歳 18.1%、35～39歳 15.9%、40～44歳 19.6%
- ・年齢別男女比は、24歳以下で女性が多いこと以外、全ての年代で男性の方が多い。女性研究者の割合が高い30代でも、男性と比較すると圧倒的に女性研究者の割合が低い。特に30代という年代が女性にとって難しい時期と推察できる。

2 ハラスメント

○セクシュアル・ハラスメント

- ・被害経験は圧倒的に女性の比率が高い。立場別で見ると、大学院生以外で高い。働く女性研究者の約4割がセクシュアル・ハラスメントにあった経験があり、女性研究者の働く環境の悪さを示す。年齢別では30歳以上のおよそ5割弱の女性が被害経験ありと回答。
- ・聞いた経験も女性の方が圧倒的に高い。現状では女性のほうがセクシュアル・ハラスメントに関して意識的である。年齢別では、女性は年齢があがるほど聞いた経験があると答えた比率が高くなるが、男性にはこのような傾向はない。しかも男性は聞いた経験ですら、最高で58.5%（男性全体では5割、女性の最高は88.0%）にしかない。
- ・以上から被害経験者は女性の方が多く、男性はセクシュアル・ハラスメントに対しての意識が決して高くないと言える。

○アカデミックハラスメント、パワー・ハラスメント

- ・被害経験は女性が4割、男性が3割弱で男性でも比率が高い。学生が特に低いということもない。特に研究機関研究員の比率が女性約6割、男性約5割と高い。回答者の多くに任期があり、立場の弱い者にハラスメントが集中する現状を反映か。大学教員は男女差が大きく、経験ありと答えたのが女性は約4割に対し、男性は約2割。年齢別に見ると、ほとんどの年代で女性が上回るが、男性が上回る年代もある。
- ・聞いた経験の有無では、全体では男女とも7割超。しかし55歳～59歳男性では約6割と他に比して目立って低い。この年代の男性がハラスメント全般に無縁で意識が低いことの現れか。

○ハラスメント全体では、学生に対するセクシュアル・ハラスメント対策は進んでいるものの、職場の同僚へのセクシュアル・ハラスメントやアカデミック・ハラスメント・パワー・ハラスメントについては全体的に比率が高く、非常勤や任期ありなど立場の弱い者へ向けられる傾向が浮き彫りとなった。同時に学会や機関をまたぐハラスメントについては、訴える場所さえないという現実がある。声をあげられないという現状への速やかな対策・改善が求められる。

3. 研究活動と家族構成

- ・研究上の時間的困難については、男女ともに子どもがいる場合に比率が高くなる。ただし、子どもがいる人で困難を感じないと回答した人は、女性 6.3%に対し、男性 20.8%と高く、子育てが女性に偏っている現状を示す。
- ・研究職への応募では、大学非常勤講師では、特に配偶者・パートナー・子どもと同居している男女で顕著な差。男性に比して女性は遠方の公募に出しづらいなど、応募する時点で制限がかかっている。
- ・世帯形成・出産・育児・介護と仕事との両立では、出産・育児についてはどの立場でも女性の方が困難を感じている人が多い。特に研究機関研究員の女性のポイントが高いことが目立つ。研究機関研究員の女性の 84.6%に任期があることを踏まえれば、出産・育児に積極的になれないか。女性研究者がキャリアアップを目指す場合、出産や育児が支障となると考える傾向やそのような事実があるのだろう。

4. 経済状況

- ・居住形態については、既婚者で単身赴任／両住まい状態である大学教員（45歳未満）女性が 65.0%と圧倒的に高い。既婚女性が大学教員の職を求める場合、単身赴任せざるをえない。
- ・個人収入を年齢別に中央値で見ると 45歳以上（60歳以上を除く）では女性が男性を下回る。特に 55歳～59歳で女性の収入は男性の約半分。女性は年齢が上がるほど個人収入のバラツキの数値も大きくなり、常勤と非常勤の収入差が広がる。特に 45歳以上の女性は常勤の職に就きにくかったと考えられる。さらに 55～59歳の女性の収入額の分布は二極化（400万円未満と 800万円以上がともに 44.4%）していて、女性が研究者になること自体がある種のバクチであった。

5. 女性研究者の生きづらさについてのまとめ

- ・働く女性研究者の約 4割、30歳以上の女性およそ 2人に 1人がセクシュアル・ハラスメントの被害経験がある。
- ・アカデミックハラスメント、パワー・ハラスメントの被害経験は女性が 4割、男性が 3割弱。特に非常勤や任期ありなど立場の弱い者にハラスメントが集中する現状を示すか。
- ・現状として、学会や機関をまたぐハラスメントについては、訴える場所がない。
- ・子育てが女性に偏りがちな現状から、女性研究者がキャリアアップを目指す場合、出産や育児が支障となると考える傾向が見られる。
- ・個人収入を年齢別に中央値で見ると、女性は年齢が上がるほど個人収入のバラツキの数値も大きくなる。特に、55～59歳の女性の収入額の分布は二極化している。